

## 九 牛肉一斤は幾キレか

根津先生は萎れ切つてやつて来た。

「過日はとんだ御災難でしたね、それから何うなりましたの」と御母様が見舞旁々訊くと、

「それから下宿の女将さんにも相談して見ましたけれども、矢張その白木屋の番頭と名乗る奴が、何處から来て何處に行つたか、少しも要領を得ないです、それで最う諦めるより外はありませぬ」と例の本久留米のやつを取出して、

「何卒鹿さんに御願ひ申します」と御母様に渡した。

「頼だ御災難でしたね、でも仕立てると是で然う見つともない品ぢやありませんよ」

「何しろ残念です、三年目にやつと買つたんですからね、併しまア構はんです、運命ですな」

「だつて残念です」と言つて御母様は考へて居たが「ねえ根津さん、社員なんか給料の割に、好い服装をしてるやうですが、遣繰が上手の故でせうかね」

「其れは然うですとも、教員なんか壹圓の金を五十銭に費ひますけれども、社員なんかと来ては、壹圓の

金を貳圓に費ひますからね」と根津先生は例の朝日の敷島を一本出しは出したが火は點けないでいつて居る。

「其様事が出来るんでせうか」

「譯はありませんよ、秘傳がありますからね」

「何様秘傳です、教へて頂戴な」

「僕も能くは知りませんが、秘傳があるといふことです」

「知らなくつちや君、譯はないといふことはないぢやないか」と御父様が突込んだ。



底抜け俱樂部

「それは然うですけれども………」と先生グツと詰つて煙草に火を點けながら、

「要するに教員は計畫が下手ですね」

「それは然うかも知れんね」と之には御父様も賛成した、御母様も異議なしだ。

「然うでせうよ、良人の知合の小川さんなんか、給料は僅た參拾圓ですけれども、御自分だつて奥さんだつて、大變立派なお仕度ですよ、毎年新らしいものが出來ましてね」

「それですか、それは奥さん譯はありませぬよ、あなた

は餘り物を正直に見るから駄目です、染方が新らしいからといつて、新調とは限りませぬよ、廿世紀の化學を應用すれば眞黒のものが純白になりますからね、そこで去年の藤色の羽織が、今年は小紋の羽織に化けて澄まして居るんです、今年の小紋が來年は又何に變化るか解つたものぢやありません、地が切れるまでは年々流行を追ふて新調ですよ、此様事は何でもないことですよ、之も先づ秘傳といへば秘傳ですね」

「成程ね」と御父様も御母様も感心の體。

「それぢや姉さんのものも、モ一度染め直すといんだ」と僕が口走ると、御母様は苦笑ひをして居る。其處に根古先生がやつて来た。着坐もしない内から校長一石願ひませうかと言ふ。

「君其様に基ばかり打つて居ちや、時間割が狂つて仕様があるまい」と御父様が言ふと、

「なアに構はんです、六回目ですから譯はありませんと大威張だ。」

「時に奥さん」と根古先生は改まつて言ひ出した。

「あなたは牛肉一斤は幾片あるか知つとるですか」

「それはツイ數へて見た事がありませんね」

「僕は知つとるです、三十二片乃至三十五片あるです」

「まア能く數へなかつたのね」

「それが此うです、實に面白い問題ですよ」と鼻汁を一つかんで、

「下宿に食倒が出来るちうと、屹度一同の食事が悪くなるです、なア根津君」

根津先生は面白いと言つた風に乗出して、

「然うだ、僕も經驗して知つてるんだ」と言ふ。

「豪らい災難です、ね」と御母様は笑ふ。

「所が今日から牛肉のお菜が平常より一片減つたですなア」

「君の下宿では平常は幾片がお定めなんだ」と根津先生が訊く

「平常は五片ぢや、そいが君今日の夕飯から四片になつたぢや、尤も醫者の試験に三度も落第した奴が三十圓から食倒して逃げたうちことを聞いて居つたから、何れ此ういふことぢやらうと覺悟は定めて居つたぢや、そいが果して今日から始まつた譯ぢや」  
「それで牛肉一斤の片數を研究して見たんだね」と御

父様が笑ふ。

「餘り面白くでもない問題ぢやないかと」根津先生が言ふ。

「こいが面白い問題になるのぢや、先づ僕の下宿には下宿人が十七人居るぢや、そいで一人前一片づゝ減すと合計十七片ぢやから、然うするちうと半斤ぢやから、此代價先づ貳拾錢ぢや、然らば下宿人が幾度犠牲に供せらるゝ時は三十圓を補ふことを得るか、さア奥さん一つ計算して御覽なさい」

「妾には其様面倒な計算は出来ませんね」と御母様は

笑つて居る。

一九八

「三十圓を二十錢で割れば可いです即ち百五十度です。そこで牛肉は一ヶ月十度ちやから、十五ヶ月間は復舊せん譯ですな」

一同は熱心に聞いて居る。先生は興に乗つて、膝小僧が益々顔を差出して来る。

「校長此算術問題を明日生徒にやらする積りです、好い問題でせう、算術などは實際問題をやらせんちうと不可んですからなア、教授法を知らんものになると仕方がないですなア、金剛石一分角の代金五萬圓

也然らば一尺角の代金幾何なりやちう問題を平氣でやらせて居る教員がありますちや呆れますなア、少し注意してさへ居るちうと、幾らでも適切な實際問題を捕ふることが出来るちやに」

「全くだね」と御父様は賛成して、

「併し十五ヶ月も牛肉を四片に減されては遣りきれないね」と言ふ。

「でも君、牛肉許り減すのちやあるまい肴だつて野菜だつて減すんだらう」と根津先生が言ふ。

「そりや無論然うちやらう、今夜の飯なども三杯半は

かなかつたぢや、其上そのうえ食事が平常いっしょより後おるゝと思おもうたら、御下おまりの寄集よせあめ物ものぢやつた」と根古ねこ先生せんせい苦笑くせうをして居ゐる。根津ねづ先生せんせいは例たれの鼻皺はなしわを一杯はいに寄よせながら、鼻いたちの聲こゑを出だす。

「飯めしまで滅ほされちや飢ひじいだらう」と御父おとう様が言いふ。

「飢ひじいちやらうと思おもふですな」

「飢ひじいだらうぢやないよ、君きみの腹はらだもの君きみが知しつてらだらう」

「そいがですな、今いま所ところは何なんともないです、併しかし四杯はい宛づ食たべて居をつたものが、三杯はい半はんになつたのぢやから、八

度たびで一度ど分ぶんですな、そいで明明めいめい後ご日にちの晝ひるになるちやと大變たいへんぢやらうと思おもふです、飯めしを一度ど抜ぬきにしたのと同おなじ事ことですから、そいで八度たひ目めに一度どづゝパンでも買かうて食たべんければ仕方しかたがないです」

「君きみ彼の露西亞ロシアパンは止よし玉たまひよ、高價たかくつて不味まずいから、普通ふつうの食パンしょくぱんは半斤はんぎんで、彼あれの二つ分ぶんあるんだよ」と御父おとう様が熱心ねつしんに忠告ちゆうこくする。

「然さうですか、併しかし僕ぼくは彼奴等あいつらの聲こゑが好きですな、三角形さんかくけいで、幾何學きがかくでは面おも白しろい問題もんだいになるのですからな、パンパンと怒鳴どなると二個ふたこの等邊三角形とうへんさんかくけいが出來でるで

す、バーンと怒鳴ると高い二等邊三角形が出来て  
 す、露西亞パンと來ると圓周上の三ツの點を頂點と  
 して書いた等邊三角形です、即ち露西亞ちうのが圓  
 ですな、露西亞と圓を書いて其の中にパンと三角を  
 入れるのです、面白い作圖ぢやありませんか』

御母様と根津先生は何の寢言やら解らぬといふ風。  
 御父様は、

「君には面白いだらうけれども、僕は其の三角形の聲  
 には閉口だ、毎日、兔耳坊の晝寢を起して了うも  
 のだから、過日なんか大喧嘩をやつたんだ」と例の一

件を話す。

「そりや災難ですなア、何とか退治する方法がありさう  
 なもんぢや」と根古先生は暫く考へて居たが、

「何うも退治する譯には行きませんな、此うしては何う  
 です、兔耳坊の耳に確かり栓をして寢かしては』

「それも一の方法だね』

「其様可愛相なことは出来ませんよ」と御母様が言ふ。

「可愛相ぢうことがあるもんですか、眠つて居る間は

死人も同様ぢやから、耳を使用する必要はないです』

「でも耳の中に温氣が籠つて、腐れると大變ですよ』



「ぢや此うしなさい」と根津先生が口を出す、

「真逆兎耳坊の耳に栓をする譯にも行きませんし、又喧嘩をしても纏まる話ぢやなし、猪尾さんを歩哨に立たせるのも可愛相だから、穩便に妥協したが可いです、恰度幸に根古君が明明後日はパンを買うので、すから、其時此家に來て居て貰つて、猪尾さんか誰れかに買はせるですね、此うして感情を和げて置いて、甘く談判をやるんです、何なら僕が談判委員になつても可いですよ」

「併し今更降伏するのも殘念だからね、パン屋風情に頭を下げるなんテ威嚴に關するんだ」と御父様は不賛成の意を表する。其處に代議士の伊奴先生がやつて來た。

「やあ伊奴君、好い處に來たんだ、少し智恵を借して呉れ給へ」と御父様は一件を話して、根古先生と根津先生の説も附加へた。

「此様問題だが、安眠妨害とか何とかいふので、警察から差止めて貰う譯には行くまいかね」

「安眠妨害といふのは、夜でなければ成立ちません、それよりも、あなたは其パン屋に怒鳴るなと叱つたの

ですか、怒鳴つて呉れないやうにと懇談したんですか」と伊奴先生が鹿爪らしく訊いた。

「さあ、其時は僕も非常に激昂して居つたから能くは覺えないが、何でも少し叱つたやうな氣がするね」

「それは少々悪策かつたですね、新刑法に依ると威力を用ひ人の業務を妨害したる者は、三年以下の懲役又は千圓以上の罰金ですからね」

「エツ」と御父様は青くなつて了つた。御母様も喫驚して、

「それ御覽なさい、良人は考が浅いから何事でも然う

ですよ、彼時だつて妾が止めなければ、何様事を仕出かしたか解つたものぢやありません、眞實にモ少し氣を注げて下さいよ」

「彼方だつて随分亂暴な事を言つたんだからね、裁判所に行く日になりや、此方には幾らでも理窟はあるんだ」

「パン屋も亂暴な事を言つたんですかね」

「そりやアあなた、甚かつたんですよ、鬚だの間拔だのつて、何程良人だつて、彼様事を言はれちや腹が立ちますアね、此方にも理窟は大有りですよ」と御母様

も一生懸命に辯護する。

「その船髯だの間拔だのと言つたのは、戸外で近所にも聞えるやうに怒鳴つたんですな」

「然うですとも、あんまり見つともなかつたから妾が良人を止めたんです」

「それならばパン屋だつて侮辱罪です、ね公然人を侮辱したる者は拘留又は科料に處すといふ條文があります、それでは僕が一つ談判して、パン屋の奴を閉戸ましてやりませう」と伊奴先生は得意然と貰を輪に吹く。

「何卒然うして下さいよ」

「何卒然うして呉れ玉へ」

と御母様と御父様は漸つと安心した。根古先生も根津先生も、流石代議士は違つたもんだと感服の體。

## 十 バン屋征伐

今日は伊奴先生がバン屋と談判をやると言ふので、根津先生も早くから来て居る。根古先生も臨時時間を消費してやつて来た。佐留先生は其様事は知らなかつたけれども、来てから事件を聞いて、そりや面白いといふので、片唾を呑んでバン屋の來るのを待構えた。やがてバンパーンといふ聲が遠くで聞える。ソレツと言つて伊奴先生は喫ひかけの卷莢を火鉢に突込んで立上ると、間もなく吾家の前でバンパーンバンパン

と怒鳴つた。すると伊奴先生が飛出して行つて、

『オイバン屋』

バン屋は聞かぬふりで再び

『バンパーンバンバンパン』と怒鳴つて行過ぎやうとする。伊奴先生は大音聲を上げて

『オイ、バン屋ッ』

『何んでえ、俺の耳が見えねえのか』

バン屋は立止る。

『バンを呉れ』と伊奴先生は十錢銀貨を示せる。するとバン屋の奴怪訝な顔をして一寸まごついたが、へ、

、と笑つて、ペコ／＼お辭儀をしながら寄て来て、  
「これは失禮致しました、實はその此家の御主人と何  
でして、……御主人が餘り御無理を仰るものですか  
ら不思議その私も自分で悪いといふことは存じて居  
ますけれども……」

と言つて、又三度お辭儀した。伊奴先生はニヤ／＼  
笑ひなが

「君は此家の主人を鱧髯だの間脱だのと言つたとい  
ふぢやないか」  
「へ、へ、不思議その腹立紛れでな……」

「オイ一寸來い」と伊奴先生は突然パン屋の手を握つ  
た。パン屋は喫驚して

「ナ、何んです、何故です」と手を振り解うとする。

「何んでも何故でも可いから一寸來い」と伊奴先生は  
パン屋を玄關に引ずりこんで、

「貴様は此家の主人の名譽に對する罪を犯して居る  
から告訴するぞ」

「何だか知らねえが私は告訴されるやうな事をした  
覺は無えんで」

「覺えがないことがあるもんか貴様は此家の主人を

「侮辱したぢやないか」

パン屋は之を聞いて急に勢付いた。

「何事かと思つてりやア侮辱だと、ふざけるない侮辱も糞もあるもんけえ」

「黙れ、貴様は此家の主人を公然大道に於て、鱈髯の間脱だのと侮辱したぢやないか、貴様が今明白に白状したんだ」

「白状したから何でえ鱈髯だから鱈髯と言つたんだ、間脱だから間脱と言つたんだ」  
紳士に對して、而かも公務員に對して、鱈髯の間脱



底抜け俱樂部

だのと言つた以上、立派に侮辱罪を構成するんだぞ』  
 公務員と聞いて、パン屋はグツと詰まつて、顔色も青  
 ざめた。

「旦那真に相済みません、何卒御勘辨を願ひます、公務員  
 の御方とは知らなかつたものですから、不思議な事  
 を申しまして、全く私が悪うございました、以來  
 決して御家の前では怒鳴らないやうに致しますか  
 ら、何卒此度だけは御許しを願ひます」と平蜘蛛の如  
 く平伏したもんだ。伊奴先生はそれ見ると言はん  
 ばかりに髯を捻つて

「公務員も公務員、國家の爲めに、一代の野心を犠牲に  
 供して、天職を奉じて居る教育家なんだぞ』  
 するとパン屋の奴又忽ち反返つて、先生を睨め付け  
 ながら、

「何アんだ、公務員と言ふから、裁判所の公判をやる人  
 かと思つたら、フン嚇かしあがらア、人を馬鹿にする  
 ない、教員が何でえ、公務員が聞いて呆れらア』と後も  
 見ないで、サツサと出て行かうとする。

「オイ、一寸待てッ』

「ぐづくして居られるけえ、間脱ッ』

「貴様、告訴するから然う思へ」

「勝手にしあがれ、青瓢箪」と戶外に出るが早い、パン  
パンパンパンパン。

これには流石の伊奴先生も眼を見張つて居るだけで、何とも仕様がな、一同は唯顔見合はせて呆れて居るばかり。

「實に失敬な奴だね、何とかしてグツと言はせてやる法はないかねえ」と佐留先生が先づ口を切つた。

「そいぢやから奥さん、僕が言うたぢやありませんか、耳に栓をしとくのが一番です」と根古先生が言ふ。

御母様は、

「然うですなえ」と力の無い聲だ。

「此様事なら僕が言つたやうに、初めから穩便に妥協した方が可かつたんだ」と根津先生も愚痴る。

「過去の事を言つても仕方がないさ、僕だつて天職を言はなけりや上出来だつたんだからね」と伊奴先生も負惜む。

「残念だなア」と御父様も溜息をつくばかり、佐留先生はジツと考へて居たが、此時ハタと膝を打つて、

「ある、妙案がある、僕の生徒に彼の露西亞パンの



子供が居るんだ』

「占めたそれは妙だ」と伊奴先生が叫んだ。

「露西亞パンの子供といふと何か彼の賣子の子供か主人の子供か」と御父様が訊く。

「支店の子供でさア此邊を賣つて歩くのは皆其支店から来るんです』

「そりや面白いぞ其奴を虐待してやるぢや」と根古先生は思切つたことを言ふ。根津先生も一寸首を傾けて、

「虐待するのは考へものだよ僕は一度甚い目に逢つ

たことがあるんだ實は或書店から綴方筆記帳の賣込方を頼まれたから強制的に生徒に買はせたものだ所が何うしても命令を用ゐない子供が一人あるね僕は強情な奴だと思つて腹が立つたから充分に譴責してやつたんだすると爺がやつて來たねそれが労働者なんだそれで僕に言ふには俺ら其日暮の労働者なんで元々子供を學校に出すなんテ贅澤は出來ねえんでがすそれでも區役所からの御達だもんで御上に御奉公と諦めてる譯でがすが身體を差上げた上に月謝まで納めなきやアいけねえんで弱

り抜いてる所に持って来て、今度帳面が入用だといふ  
 んでがせう。仕方がねえから参錢もかけて買つて  
 遣りやア之で無えと吐かしあがるんで、何様物かと  
 思やア赤い線が二三本引張つてあるばかりでがせ  
 う、此様物に十錢も出して是非買はなきやアいけね  
 えといふ規則もあるめえし、馬鹿くしいと思ひや  
 したから、参錢のやつを持たせてやるてえと、先生か  
 ら叱られたんで、今日から學校に出無えと吐しあが  
 るでがす、俺は結句幸でがすから、今日は子守をやら  
 せて居る譯なんでがすが、出さなくつても可いんで

すか、先生さんも書店をなさるんであるめえし、彼様  
 物を買はせるよりやア、一人でも弟子が多いほど得  
 でがせうといふ談判さ、丸で僕が月謝を取つ居るも  
 のと思つて居る語氣だ。仕方がないので、買はなく  
 とも可いといふことにして、翌日から出て來ること  
 は來たが、僕は何だか虫が好かないから、随分虐待し  
 てやつたんだ、すると爺が憤りあがつて、區役所に出  
 陣して退學の談判を持込んだもんだ、それが八ヶ間  
 敷問題になつてね、僕も其學校に居難くなつたもん  
 だから、此校に轉任した譯さ、と鼻皺を寄せながら語

る。

「そりや大失策だ、今度は此うやるんだね、先づ通信簿の成績をウンと下げるんだ、すると彼奴は少し金を持つて居て、子供の教育には注意してるんだから、大に心配し出すに定まつてるね、其處に持つて行つて、御息の教育に就て御相談致したいことがあるから、一寸來て呉れとやるさ、奴喫驚して飛んで來るに相違ないんだ、そこで家庭教育の注意なんか與へて、親切に待遇した上で、貴下の家には近頃色んな賣子が集まるのだから、先づ其賣子の風儀を直さなければ、

子供の教育も甘く行きません、それで甚く風儀の悪い賣子は、断然寄付けないやうにするが可いです、聞く所に依ると、過日なんか貴下の賣子が、或紳士の家に怒鳴り込んで、強賣しやうとした奴があつたさうだ、其様奴は警察沙汰にならない内に、早く追出すが可いですな、之はほんの餘談ですが、矢張家庭教育に關係のあることですから、申上げて置きますとやるんだ」と佐留先生が言ふ。

「所が彼賣子の名は分つてるんですか」と伊奴先生が訊く、

「さあ、それは分らんね」と御父様は當惑の體。

「ナニ名なんか分らんでも大丈夫です、彼奴の顔が名よりも確實ちや、正五角形ちやからな」と根古先生が言ふ。一同がドツと笑つた。

「それに前額面と鼻の頂點と頬骨の頂點と腮の頂點とが同一平面上に有るのですから、一度見るちうと一生忘るゝ事は出來ん顔です」

「眞實た、名よりも其の方が確實だから、此れくの顔を提げて居る賣子が、怒鳴込んだといふことを注意して置くんだね、すると彼奴直ぐに放逐されるに定

まつてるんだ、彼奴が放逐されると他の奴等震ひ上がつて、此家の前ではパンともカンと言ふことは出來やしない」と佐留先生は得意満面といふ體だ、何うやら僕の歩哨勤務も免除されさうになつたので、大喜びで居ると、今度は他のパン屋がパンパーンとやつて來た。僕は、大威張で飛出して行つて、パン屋「パンを呉れ」とやると、奴眞實と思ひあがつて立止まつたから、「今に見あがれ、甚い目に合はしてやるから」と言つてやると、「此の餓鬼」と言つて押かけて來やうとしたから、僕は石を一つ投付けて逃込んで了つた。するとパン屋の

奴やつおし押おしかけて來きあがつて、

「此こ家の息子かすこが石いしを投なげ付けてるんで危あぶなくつて仕し様が無なえんだちつと氣きを注つけて呉くんねえ」と格かう子の外そとから怒ど鳴なる。「石いしを投なげるのは子こ供どもの天てん性せいだ其それを避よけて通とるのが大おと人の義ぎ務むだ」と伊い奴ぬ先生せんせいが怒ど鳴なり返かす。「何なんだと、唐たう變へん木ぼく奴め何なん程は子こ供どもだつて石いしを投なげ付けて堪たまるけえ」

「然さうさ子こ供どもが石いしを投なげ付けられて堪たまるもんか」と佐さ留る先生せんせいが笑わらふ。

「何を言いつてあがるんでえ子こ供どもちや無なえ大おと人なだ」

「子こ供どもは石いしを投なげ付けられても可いといふのか馬ば鹿かッ」と伊い奴ぬ先生せんせいが怒ど鳴なる。パン屋やの奴やつグツと詰つつて。

「解わからねえ奴やつ等らだ」と言いつて眼めをバチクリして居ゐる。

「何ど方ちが解わからないんだ何なん程は子こ供どもだつて石いしを投なげ付けられて堪たまるかと言いふから然さうだと言いつてるぢやないか」

「何い程ら大おと人なだつて石いしを投なげ付けて堪たまるけえ」

「然さうよ大おと人なが石いしを投なげ付けて堪たまるか」と一み同んがドツと笑わらふ。

パン屋やの奴やつ譯わけが解わからなくなつて口く惜やしさうに行いつて了しまふ。

## 十一 五錢玉の一件

パン屋征伐の計畫は折角定つたけれども。間もなく暑中休みとなり暑中休みが済んだら陽氣が涼しくなつて、パン屋もうるさくは來なくなつたので、皆んなが何時となしに忘れて了つた。

僕たちが裕に着更へて貰つた時分、お父さんは風を引いたと云つて、四五日も學校を休んだ。話相手が無いのと、部屋が塞つたのとで、現金にも集まる者が少なくなつたが、其の代り女の先生が盛んに御見舞にやつ

て來る。

今日は日曜だから見舞客が多いだらうと云つて、姉さんは兎耳坊と虎ちゃんを連れて、何處かに遊びに行つたので、大風の風いだやうだ。

十時頃鶴尾先生が來て、お母さんと話をして居る。恐しく髪の毛が縮んだ女で、僕たちが西洋婦人と綽名をつけて居る女先生だ。

「モ一直きにお正月が來るので困りますねえ、綿入れの洗濯を致しませんと、子供に着せるものがありませんけれども、まだほぐしても居ない始末で、ホントにい

らいらして了ひますよ』

二三三

とお母さんが情け無いやうな顔をする。すると先生は自分の袖を胸まで引っぱつて来て、

『わたしお正月と聞くと冷やつとしますわ、此節は皆んな贅澤になつて子供でも随分立派な服装をして來ますからねえ』

『さうですよ、家の鹿なんか、モ一お正月の儀式には出しません、お祝ひに行くのか、恥曝しに行くのか分りませんもの』

僕はお母さんの言ふことがサツパリ分らないね、服

装なんか如何にして居たつて、少しも恥かしいと思ふことはありません、なんかんと、姉さんを叱る癖に、先生にはあんなことを言つて居る、先生も先生だ、

『全くですわ、わたし生徒に恥かしくつてねえ、何の因果かと思つて泣きたくなりますわ』

矢張お母さんに賛成してる様子。

『あなたも早くお嫁にいらしたのが可いですよ、女は一度嫁入時を取り逃がすと、モ一中々賣れませんかからねえ』

お母さんが熱心らしく言ふと、先生は寂びしい笑ひ

をしながら。

『わたしのやうな者を貰つて下さる人はありませんわ、實はね奥さん、親友の片野と云ふ方と二人で各々國元に歸つて縁付きする事にしませうと堅く約束したこともありません。たの所がイザ辭職願を出さうと云ふ段になりますと片野さんが斯う言ふぢやありませんか、自分も一時はさう決心したけれど、勘定して見ると今少し嫁入仕度料が足りないから、モ一年餘り勤めやうと思ふ、折角の約束だけれども、あなたいけ辭職して下さいと、斯うなんですよ、馬鹿に

してるぢやありませんか、私も腹が立ちましたから、早速此方に轉任して了つたんですよ』

『まア甚いんですねえ、嫁入仕度が何です、教育家ぢやありませんか、心さへ美しからうものなら裸で行つたつて恥かしい事はありません、若し仕度がなければ貫はぬと言ふやうな男なら、此方から行かぬことです、なんテ意氣地なしでせう、家の鹿なんか裸で嫁にやります、それが眞實の教育家だらうと思ひますねえ』

『デモ奥さん容貌でも好ければ、仕度料を取つても嫁



入が出来ますけれども、わたしのやうに容貌も悪く  
し仕度も無いと云ふのでは、逆も駄目ですわ、わたし  
諦らめてるんですよ』

膝の絲をむしりながら先生は萎れて了つた。

『何うして、あなた御容貌なんか、どんなに安く  
踏んでも中以上です、意張つて居らつしやいませよ』  
僕は先生の髪の毛の縮れて居るのを思ひ出して、可笑  
くなつたから、

『お母さん、先生は髪の毛が縮れて居て、西洋人のやうね  
え』

と何の氣なしに口走ると、お母さんは恐い目をして  
『コレツ』と僕を白眼めて置いて、

『まあ此の子は、なんテ悪くらしいでせう、ホントに子  
供は正直で、人様の入らした時には、ハラ／＼致しま  
すよ、御免下さいな、ねえ鶴尾さん』

僕は何も悪いことを言つた覚えはないので、叱られ  
る譯が分らないけれども、兎に角頭を搔いて縮んで居  
ると、先生は顔を眞赤にして苦笑ひをしながら、

『子供は正直ですからねえ、猪尾さん、眞實だから構は  
ないわねえ』

「アラ鶴尾さん、わたし其様な氣で言つたのぢやありませんよ、子供は悪い氣で言ふのぢやありませんから、氣にしないで下さいな」

何だか大人の言ふことは廻りくどくつて面白くないから、僕は戸外に飛出して遊んで居ると、間もなく先生が出て来た、先刻の事が積に障つて居るから遠くに駆け出さうとすると、先生の奴、猪尾さん、と呼ぶものだから、此奴お母さんの居ない處で、僕を虐める積りだなと思つたけれども、構ふことは無いと我慢して、徐々側に寄ると、先生蝦蟇口から五錢玉を摘み出して、

「お煎餅でも買つてお上りなさいな」

と僕の手握らせた。此奴ア有り難いと思つて駆け出さうとすると、

「ちよいと、猪尾さん、それからね、他の先生に私が来たことを言つちや不可ませんよ、諾ですか、屹度ですよ」

僕は五錢玉が嬉しかつたから、委細構はず、

「そんな事言ふもんか、屹度言やしないよ」と言ふと、先生安心して歸つて行つた。煎餅屋から煎餅を買つてパリパリと食へながら門の前に立て居る

と鳩宗先生がやつて来た、眞ッ白く白粉なんか塗り付  
 けて、香水の匂ひが臭いッたらありやしない、此の先生  
 は顔にソバカスが一面なので、しよつちう鏡と白粉を  
 持つて居て、少し剃げて来ると、直ぐに便所に這入て直  
 すので、大評判だ、小便をしながら白粉をつけるなんて、  
 汚ない先生ぢやないか、過日はソバカス取り薬をつけ  
 て、顔一面に腫れ上がったものだから、一週間も學校を  
 休んで養生したけれども、肝腎のソバカスは一粒だつ  
 て取れちや居ないや。虚飾家で高慢さきで、イケ好か  
 ない先生サ、何時かの天長節に先生が二階に上る所を



下から覗いて見たら腰から上は縮緬の五ツ紋だった  
 が袴の下はポロ／＼の腰巻一つだった。それに長い  
 金の鎖を首にかけて居るので、すばらしいものだと思  
 った。居たら何アんだ、黄色な絹糸の紐だ、故意と黄色に  
 したところは思ひ付きたねえ。歸つてお母さんに話  
 したら、姉さんと二人で甚どく感心して、了つて根津先  
 生ぢやないが、全く計畫が巧いと言つて居た。伊奴先生  
 は法律上詐欺罪を構成するとか怒つて居た。

「猪尾さん今日は」

先生は首を曲げて品を作りながら、

「誰れも来て居ないこと……さう……私の前に

誰れか女の先生が来たでせう」

と訊く、五錢玉の一件があるので、

「誰れも来はしないよ」

と空とぼけてやると、又首を曲げながら「さう」と言つ  
 て内に這入つた。何か包物を持って居たから、美味もの  
 ぢやないかと思つて附いて入ると、包物は玄關の二疊  
 に置いて行つたから、そつと開けて見ると梨の籠だ。

先生の奴馬鹿に濟ましたもので、學校の禮法の稽古  
 見たやうな事をして、お母さんにお見舞を言つた後で、

お父さんの枕元に行つて何遍もくお辭儀をして茶の間に來た。お母さんは先刻鶴尾先生から貰つた梨を出して、

『粗末なものですけれども、一つ御剃きなさいな、梨も暑い時だと可いですが、斯う涼しくなつては駄目ですねえ』

と言ふ。何んだ先刻は結構なものを有り難うと、鶴尾先生に御禮を言つた癖に、粗末ですなんて、おまけに此の先生のも梨だから面白いや、先生の奴、何んな返事をするかと思つて居ると、

『どう致しまして結構ですよ、私梨は大好きで、己れの好む所之を人に與へよとキリストも言つて居ますから、私はお客さへあれば何時でも梨を出すのが癖ですよ、日本人は人に物を上げる時に、粗末な物ですと云つて上げる習慣だけれども、西洋ではお美味から召上がれと、大に自慢して上げるんですわ、それが夫れキリストの教へにあるからなんです、日本人はまだ野蠻で不可ませんねえ』

『オヤ、くわたし野蠻でしたねえ、わたし達のやうに年を取りますと、梨は齒を痛めましたね、涼しくなる

と何うも不可いけませんですよ、ですけれどもお若い方かたは可いいだらうと思おもひまして差さ上げたんですから何どうぞ召め上あつて下くださいな』

先生せんせいは好すきだと言いつて意い張はつたけれども、ちよつとも食たべやうとはしなかつた。

『私わたくし奥おくさんに伺うかがつて見みたい事ことがありますのよ』  
と先生せんせいは例れいの如ごとく首くびを曲まげて、眩まぶしさうにお母かあさんを見みた。

『何なんです、改あらたまつて』

お母かあさんが笑わらひながら訊きくと、先生せんせいは得え意い然ぜんと少すこし

膝ひざを進すすめて、

『陸軍大尉位りくぐんたいいでは人並ひとなみの家庭かていは造つくられないでせうねえ、タツタ七八拾圓せんの月給げつきよでは困こまりますわねえ』  
お母かあさんは目めを丸まるくして、

『陸軍大尉りくぐんたいいはあなた奏任官そうにんくわんですよ、立派りつぱなものぢやありませんか、八拾圓せんといへば一寸主人ちよつとうちの倍はいですからねえ、そりやア申分まをしぶんはありませんね、其その方が何どうかなさつたんですか』

『實じつは申まをし込まれたんですよ、だけれども私餘わたくしあまりすゝみませんの』

「オヤ、又ですか、能くあなたは申込まれますねえ、大概にしてお定めなさつてはどうです」

「今年になつて是れで恰度七人ですわ、だけでもねえ、自覚した女子は單に異性と云ふだけで、結婚すると云ふことは出来ませんからねえ、結婚に依りて生活の向上を爲し得るか何うか、それが第一の問題なんです」

お母さんは押黙つて了つた。先生の言ふことは六ヶ敷くつて、僕にはサツパリ分らないが、大方お母さんも分らぬのだらう。先生は茶を一杯飲んで、

「此の前の醫學士なんか、テンデ借財の中に生きて居る有様なんですから、私どもの理想として居ます家庭は造られないのであります、それに醫者なんて云ふ者は理想が低くつて肉慾的の人物が多いのです」

「あの中學校の先生は、可さうでしたけれどもねえ、惜しうござんしたわ」

「まア奥さん惜しいなんて、餘り人を見くびつて居らつしやるわ、私教員は大嫌ひなんです、宗教家と教育家は偽善者の標本ですからねえ、あの時は恰度私が拒絶しやうと思つてる矢先に、先方の謝絶が來たの

です、教員の妻になる位なら私は死んで了ひます』  
お母さんは苦い顔をして、糞に火をつけながら、

「眞實さうですよ、中學校の先生はまだしもですが、小  
學教員の妻なんか誠に嫌になつて了ひますねえ』  
奥の方にお父さんの寢返りする音が聞えた。先生  
は目を丸くして

「アラ奥さん、氣を廻はして下さつては、困りますわ、こ  
ちらの校長先生なんか、教員と云つても特別なん  
ですもの』

「否、え何う致しまして、小學教員は神聖な天職なのに、

待遇が悪うござんすからねえ、先刻も鶴尾さんと愚  
痴を滾しましたんですよ、あなたは小學教員と云つ  
ても特別ですけれども、鶴尾さんはお可愛相に紋付  
一襲ありませんからねえ、嫁入するにしても困るん  
ですよ』

僕は五錢玉の一件を考へ出してギョツとした。先  
生は顔を火のやうにして俯向いて居たが、

「鶴尾さんが入らつしやいましたの、お一人で？」と首  
を上げた時は、色青ざめて眼がギラ／＼光つて居た。

「ハア、たつた今お歸りになつたばかりですよ、あなた



がモ少しお早いと可うござんしたねえ」

何うしたのか先生は突然ハンケチを顔に當て、オ  
イ〜と泣き出した。僕も驚いたが、お母さんは理由  
が分らないので挨拶に困つて居る。

「わたしの申上げたことが何か御氣にでも障つたの  
ぢやありませんか」

とお母さんが先生の顔を覗き込むやうにすると、先  
生は首を振つて、

「鶴尾さんも餘まりですわ私を出し抜いて、あゝ口惜  
しい」

先生中々泣き止みさうにもない其處に根古先生が  
這入て来た。先生勿々に涙を拭いて、居住ひを直した  
が涙で白粉が剝げた部分に、例のソバカスが梨の皮見  
たやうに現はれて居る。お母さんは見兼ねたと見え、  
先生を臺所に招んでコソ〜話して居たが、十分ばか  
りして立派に白く塗り直して出て来た。根古先生は  
お父さんの枕元に坐つて碁の話しに夢中で居る様子。  
此の隙に先生はお暇を言つて歸りがけに、

「粗末な物ですけれども」  
と梨籠を差出した。お母さんの妙な顔つたらあり

やしない。

「まあ結構な物を有り難うございます」  
と来たもんだ。僕は可笑しくつて仕様がなかつたから、大声を上げて笑ひ出すと、先生もお母さんも遂々、吹き出してしまった。

「面白いことがありますかなア」

と根古先生が奥から出て来た。鳩宗先生は逃げるやうに歸つて了ふ。お母さんはお腹を抱えながら、鳩宗先生のキリストの講釋を話して聞かせたら、根古先生も大笑ひ。

「あの女はそんな奴ぢや、朝から晩まで嫁入口ばかり探してからに一寸申談でも云ふものがあるちうと、直ぐに申込まれたと吹聴して廻るです、あなたにも陸軍大尉を話したぢやらう、僕たちはモ—一周間許り聞きづめで、中てられて居ますぢや」

「根古さん、生活の向上つて何の事です、譯も分らぬ漢語なんか使つて、人を馬鹿にしてるぢやありませんか」

「あゝ、あれですか、あれはあの女の口癖ぢや、生活の向上ぢやなくて、結婚の口上ぢやらう」

## 十二 便所でお化粧

翌日學校の裁縫教室で、鶴尾先生と鳩宗先生と何か  
 コソコソ話して居たから、そつと窓から覗いて聞いて  
 居ると、

「鶴尾さんは餘んまりぢやありませんか、是れほど親  
 密にしてるのに、わたしを出抜くなんテ、わたし口惜  
 しいわ」

「アラ、何にもわたし出抜いた覚えは無くつてよ」  
 それ來た、五錢玉だ、僕も虐められるのぢやあるまい

かと思つたら、背中が冷つとした。

「わたしチャンと知つてるわ、陰しても駄目ですよ」

「わたし困つて了ふわ、何事だか知らないけれども」  
 鶴尾先生は身に暗い所があるので、何事ですかと問  
 ひ詰める勇氣がないらしい。

「あゝ口惜しい、わたし何うしやう」

今に何方か泣き出すだらうと思つて居たら、案の如  
 く鳩宗先生が泣き初めた、又顔が梨の皮になるから面  
 白いや、鶴尾先生は、

「わたし困つて了ふわ」

とばかり、おどくして居る。鳩宗先生はさも切なさうに、ハンケチを顔に押し當て、嘔り上げながら、「あなたは校長先生のお家に一人でいらしたでせう、わたしに對して餘り不親切ぢやありませんか、あなたは姉妹にならうと誓つた事をお忘れですか、あなたは偽善者よ、わたし今日限り絶交します、あなた見たやうな方と交際して居ると、何んな事をされるか知れはしない、お尻の毛まで抜かれるか分りませんか、お尻の毛なんか抜かれて、わたし何うしやう、あゝ口惜しい」

鳩宗先生は地たんだ踏んで、ヒーと泣聲を上げた。

鶴尾先生もおろく聲

「アラ、誰れがそんな事言つたんでせう、猪尾さんが言ひつけたに違ひないわ、あの子は何んテ憎らしいだらう、ホントにあんなイケ好ない、悪戯な餓鬼はありやしない、ねえ鳩宗さん、猪尾さんが何んなことを言つたか知りませんけれども、わたし全くあなたを抜く精神ぢや無かつたんですわ、校長先生の御近所に親戚があるものですから、其家を訪ねた次手に一寸立寄つて梨をニツ三ツ差上げて来たさうなんで

すよ』

「そんならあの梨はあなたがッ……」  
顔に當てゝ居たハンケチを突然に離して眼を光らした。

「えッ何んですッテ」

「否、アノあなたは梨を持ってお行でなさつたのと訊くんですよオ、あなたが梨を持っておいでなさつたばツかりで、わたしは非常な恥をかいたんですよ、あゝ口惜しい、あなたは不親切なばかりではありません、わたしを侮辱したんです、あなたは親友を侮辱

する悪魔なんですよ、あゝ口惜しい、わたし何うしやう」

と鳩宗先生はジタバタ足さりして泣き悶える。

「わたしが梨を呈げたのが、そんなに悪るかつたなら、今度あなたと二人で何か持つて出直しても可いことよ』

「それちやアあなたは二度で、わたしばかり一度ですわ、宜うござんす、わたしはモ一度一人で行きますから」

「アラ、それではあなたも一度は行らしたの」

「否、わたし親友を出抜くなんてことは致しません、只今限りあなたとは絶交致します」

と鳩宗先生は泣きながら室を出て来た。見られては一大事と身をすくめて逃げ出すと鶴尾先生が、

「猪尾さん、猪尾！」

と追っかけて来て、

「あなたは宜うござんすよ、あれほど頼んで置いたのに鳩宗さんに言ひつけるなんかして、覚えて居らつしやい」

と白眼つける。



底抜け倶楽部

「僕何にも言やしないよ、あの後で鳩宗先生が来て、お母さんから聞いたんだよ」

「アラ、鳩宗さんも行つたんですか、何んテ云ふ人でせう失禮な」

鶴尾先生は顔を真つ青にして馳け出したが再び鳩宗先生を引つ張つて来て、

「鳩宗さん、猪尾さんが證人ですよ、あなたもお一人で行らしたと云ふぢやありませんか、御自分の事は棚に上げて、わたしをお責めなさるのは無理ですわ、わたしをタンと馬鹿になさいまし、ドーせわたしは學

問がありませんから、わたしは御多福の意氣地なしですよ」

今度は鶴尾先生がオイ／＼泣き出す、此れは大變な事になつて了つた、何うしたら可いものかと、僕も泣き出したくなつたら、恰度仕合せにも始まりの鐘がなつたので、二人共涙を拭き／＼狼狽て、行つて了つた、僕は命拾ひをしたやうだつたね。

鳩宗先生が屹度便所に這入るに違ひないと思つて、時間が終ると直ぐに便所を覗いて見ると、お母さんの糞入見たやうな物が落つこつて居る、拾つて見ると、七

ツ道具と云つて白粉なんか入れた袋さ、テツキリ鳩宗先生の物に違ひないと思つたけれども、故意と僕の受持の伊奴先生に届けた例の代議士先生よ。

「是りやア面白い、ハツ、珍らしい拾得物だ」

と中を調べて居ると、其處に恰度鳩宗先生が來た。

「鳩宗さんは是は誰れのでせう」

鳩宗先生はギョツとした様子で、自分の懐に手を入  
れながら、

「アラ、何處に落ちて居たんでせう」

流石は飾虚家だけに直ぐ自分のだと言はぬところ

が感心だ。

「便所で拾得したんです」

「どなたのでせう私一寸とも見覚えがありませんわ」と空とぼけて居る。先刻泣いたので梨の皮であるべき筈の顔が、眞つ白く塗り直してあるから、先生例の便所白粉を濟まして出る時、落したに定まつて居るけれども、その白らばつくれの上手と言つたらありやしない。其處に鶴尾先生が來た。

「鶴尾さん、是はあなたのぢやありませんか」

「否え」



と言つて手に取つて見ながら、

「鳩宗さん、あなたのでせう」

「失禮なこと仰しやい、わたしそんな物見たこともありません」

と顔を眞赤にして、逃げるやうに行つて了ふ。

「便所に落ちて居たと云つてはねえ、ナンボ惜しくつても名乗出る譯にや行くまいよ、阿波の鳴門のお弓ぢやないが、折角巡り會ひながら、拾圓取つても氣は教育家の名乗るに名乗られぬ此の場の義理、さぞや惜しい事、でせう、同情に堪えませせん」

と伊奴先生は鳩宗先生の後姿に一寸お辭儀して、腹を抱えて笑ひながら、教員室に持つて行つて、展覽會を開いて居た。次の日曜日、鳩宗先生と鶴尾先生と、仲直りが出来たと見えて、打揃つて見舞に來た。

其處に伊奴先生、根古先生、佐留先生などがやつて來て、七ツ道具の落し主が分からぬから、學校に保存して標本にしたが可からうなど、言つて居る。今度は雑誌社の宇馬さんが來た。形の如く見舞を言つた後で「ヤア今日は大分賑やかです、ね、時に諸君、斯んな新聞が出て居るが、心當りはありませんか」

と言つて、ポケットから新聞を取り出して讀む。聞いて見ると。「或新聞記者が陸軍大尉に化けて、結婚媒介所に求妻を申込んだところが、其處には女の申込者から來て居る寫真が數十枚あつた、其の中から縮緬の五つ紋に袴を着けて、首に金鎖をダラリと下げて居る令嬢を選んで、其の素性を聞くと、某小學校の女教師だと云ふ、それでは見合ひをしやうと云ふので、日比谷公園の松本樓で會つて見たら、例の五つ紋に袴で、白粉を壁のやうに塗つて居るが、金鎖は下げて居なかつた。面相は中以上で、物を言ふ毎に首を曲げては品を作る

工合などは、何とか云ふ女優の型を取つて居る積りらしかつた。記者が獨身ならば、或は一寸迷はされたかも知れぬが、便所に立つ時に裾を見ると、豈驚かざるを得んや、五つ紋は幽霊で、腰から下が無いのだ、事茲に至れば記者も恐縮して、了ひ可い加減な挨拶をして分れたが、本人は毎日、く媒介所に大尉の返答を急いで來るさうだ」と、先づ斯うなんだ。

「其奴は心當りがあるやうで、無いやうぢや」と根古先生が言ふ。

「首を曲げるところが乙ぢやないか」

と佐留先生が鳩宗先生を見て笑ふ。

「幽霊の五つ紋とは可かつたねえ、金鎖は何故下げて行かなかつたんだらう、黄色の絹紐で胡麻化せば可かつたのに」

と代議士の伊奴先生が言つたので、皆んながドツと笑ふ。鳩宗先生は顔を真赤にして居る。

「諸君之は笑ひ話ぢやありませんよ、教員の態面問題ですからねえ、僕は來月の雑誌の社説で此問題を大的に論ずる積りです」

「尤もちや、是りやア大問題になるです、算術で云ふと

比例問題ぢやなア、醜業婦の結婚媒介所に對する比と、女教員の結婚媒介所に對する比と、等しいちうこととは出來んぢや、是は比例の定理で説明することが出來るです」

根古先生は眞面目な顔で、例の如く淺草紙で鼻汁をかむ。鳩宗先生は眞つ青になつて居たが、間もなく鶴尾先生を誘つて歸つて了つた。皆んなが顔見合はせて又ドツと笑ふ。お父さんは奥から宇馬さんと呼んで、其の事は少し考へがあるから、何卒雑誌で論ずることとは見合して呉れと頼んで居た。

底拔け俱樂部終

大正元年十一月六日印  
大正元年十一月十八日發行

底拔け俱樂部與付  
定價金參拾五錢

著者 叉 狂

東京市本郷區森川町一番地

藤原爲司

東京市小石川區久堅町百八番地

小泉和三郎

東京市本郷區森川町一番地

有終閣書房

發行所

印刷者

東京市本郷區森川町一番地

小泉和三郎

東京市本郷區森川町一番地

有終閣書房

不許複製

發賣元

東京市本郷區森川町  
振替一九四六七番

文成社





270  
489

終

